学習システム促進研究センター
『学習システム研究』第 2 号　2015(pp.23-36)

# 真正な実践のための哲学研究者の学習過程の探求

## ―畠中和生「人間観の類型論」を手掛かりに―

菅尾 英代・畠中 和生・池野 範男

本研究の目的は，つぎの問いに対する答えの一つを得るために，専門科学者の研究過程を学習過程に変換することにある。その問いは,「どうすれば児童･生徒が学習を通して深い知識を獲得できるようになるのか。」,また,「そのために教師はどのような過程を通して教材研究を行えばよいのか。」である。このため，研究論文の構成・構造の分析や関連専門科学の基礎概念・基礎理論を用いた読解を通して研究者が行う研究論文の作成過程を導き出すことで研究者の学習構造を見出し，学習過程に変換することを試みる。

本稿では，価値領域における哲学分野の研究を取り上げている。対象の研究論文は,「人間観の類型論」(畠中和生，2009）である。結果，研究者の探究活動を 5 段階で示し，各過程における具体的な研究者の学習のあり方を整理した。これを踏まえて，教師が人文系科目において深い理解を得るための真正実践として教材研究を行う方法や視点を提案している。鍵となるのは，教師における「学問を基盤とした探究過程と探究の視点に関する正確な理解」と「既有知識と得られた情報における関連性の発見」である。本稿では，教師が抱える専門科学の学問的理解の信頼性において指摘できる課題を克服するための手立ての一つを提示している。

キーワード：読解，価値，探究，学問性

# Exploring the Learning Process of a Philosophical Researcher for Authentic Practice:

## Implications from Kazuo Hatanaka's "Typology of Human Beings"

Hideyo Sugao, Kazuo Hatakenaka and Norio Ikeno

The purpose of the current study was to translate a specialized scientist's research process into a learning process, in order to gain answers to the following questions. These questions are; "How can children and students attain deep knowledge through learning?" and "What type of process should a teacher take in studying teaching materials?" For that purpose, the current study aimed to elucidate the learning stages of a researcher by understanding the paper writing process through analyses of a research paper's structure and by reading of basic concepts and theory in the related field, ultimately translating the discovered learning structure into an effective learning process.The current paper concerns a research study in the field of philosophy. The target research paper

was “Typology of Human Beings” by Kazuo Hatakenaka（2009）. We organized this researcher’s research activities into 5 different stages, and described concrete learning methods at each stage. Based on this, the current study proposed methods and viewpoints of teaching material studies for a teacher to conduct authentic learning in order to achieve deep understanding in the field of humanities. The key is for teachers to attain “an accurate academic understanding of the processes and viewpoints of an investigation” and “a discovery of associations between existing knowledge and new information.” The current paper proposes a solution to overcome reliability problems that teachers possess in achieving the academic understanding of specialized sciences.
Key Words: Reading, Value, Enquiry, Disciplinary

## １．本稿の目的と研究論文の紹介

本稿は，価値領域における哲学分野の研究論文を取り上げ，その研究論文の構成・構造の整理，専門科学者（畠中和生）の関連研究内容，関連専門科学の基礎概念・基礎理論を用いた研究論文の読解，および，専門科学者の論文作成過程の再構築を通して，研究者の研究過程を探究活動の過程に変換するものである。

近年の学習科学研究の成果によれば,「事実と手続きの知識は，それが適用可能な状況を知っており，新しい状況に応じてそれらの知識を修正する方法を知っているときにのみ役立つ」とされ,「1980 年代までに，認知科学者たちは，子どもたちが表面的な知識よりも深い知識を学び，現実世界や実践的な状況におけるその知識の使い方を学ぶと，本質的なものをよりよく覚え，それをより広い文脈へ一般化できることを発見してきた」とされる。このような深い知識は,「真正実践（authentic practices)」により獲得される。「真正実践」とは,「ある領域の専門家と似た活動に従事することで生徒はより深い知識を学ぶ」という学習科学研究の中心的テーマの一つである [1)]。

本稿では，この学習科学研究の成果が，教師が授業を組織するために必要な学問的な理解を深めることに有用であると考え，専門科学者の研究過程を学習過程に捉え直し，教材研究に必要な内容と方法を探求することを試みる。

対象とする研究論文は,「人間観の類型論－マックス・シェーラーの哲学的人間学（3)」[2)]である。執筆者である畠中和生は，広島大学大学院教育学研究科教授であり，哲学・倫理学を専門としている。哲学研究の主たる柱は,「人間と愛」である。

本研究論文は，ドイツの哲学者であり，哲学的人間学の創始者であるマックス・シェーラーが提示する人間観の 5 類型について，その遺稿集などを踏まえて再考したものである。これは，畠中が取り組む「人間と愛」に関する哲学的な理論を解明する研究のひとつに位置づけられる。考察の主な対象は，シェーラーの論文「人間と歴史」における 5 つの人間観に関する記述と「他の著作や遺稿集における関連する記述」[3)]である。

なお，シェーラーが用いる「人間観」という言葉は，哲学において一般に「人間とは何か」[4)]を追究し考察する人間学によって導かれる人間像と考えてよいであろう。したがって,「人間観」それ自体においては，シェーラーの 5 類型の他にも歴史的・宗教的背景などを踏まえてさまざまな人間像が認識されてきている。また，シェーラー自身においてもこれらは固定的な概念ではなく，流動的な知識であり，時を重ねることによってその意味付けが深められていったことはいうまでもない。

## ２．研究論文の構成と構造

本研究論文は，つぎの 7 つの節から構成される。「はじめに」「１．ユダヤ教＝キリスト教的人間観」「２．ホモ・サピエンス（叡智人）の人間観」「３．ホモ・ファーベル（工作人）の人間観」「４．生命主義的人間観」「５．要請的無神論の人間観」「おわりに」である [5)]。ここでは,その構成に従って各節の概要を示し，構造を明らかにする。

### （１）本研究論文の構成に基づく内容整理

「はじめに」では，本研究論文の問題意識が提示される。ここでは，シェーラーの「人間観の類型論」に関して，従来，論文「人間と歴史」に依拠して記述や考察がなされてきたことが指摘されている。畠中はこの現状に対し，シェーラー自身が主張する「生命と精神との協働あるいは調和としての人間観」を深く理解するために,「シェーラーにおける人間観の類型論についてきちんと理解しておく

ことは，シェーラーの哲学的人間学の思想を解明するうえで必要不可欠な作業」であるとする。そのため，畠中は，シェーラーの他の著作や遺稿集を「可能な限り参照することによって」，その 5 類型を「あらためて確認してみたい」としている[6]。

「１．ユダヤ教＝キリスト教的人間観」では，①「宗教的信仰の所産としての人間理念」，②「堕罪神話と不安感情の社会的起源」に分けて，「神の似姿として神的理性に参与する人間」を理念として認識されてきた人間観がシェーラーの見解に基づき整理・考察される。①では，人間観の定義とそれが生み出された経緯が整理される。また，②では，「人間と歴史」においてシェーラーが言及するにとどまった「消極的かつ抑圧的な感情状態」によって生み出される「支配的な宗教理念」という見解について，畠中は遺稿集の理解を通して，その真意を追究している。これにより，畠中は，シェーラーが「抑圧的な感情」は「ある社会的な起源」を有するものであると考えていたことを明らかにする。そして，「国家体制の変革とともに」その感情の有り様が変わっていくはずであることを畠中は推察し，他の著作を通してこれを立証している[7]。

「２．ホモ・サピエンス（叡智人）の人間観」では，①「『理性的存在者』としての人間」，②「叡智人説の自明性に対する疑念」に分けて，「ギリシアのロゴスからヘーゲルの世界精神に至る」人間理念として認識されてきた人間観がシェーラーの見解に基づき整理・考察される。①では，人間観の定義とそれが生み出された経緯，基本的特徴に加え，「理性」という言葉の意味するところも示される。②では，「人間と歴史」においてシェーラーが疑念を抱いたこの人間観が抱える「自明性という性格」についてのシェーラー自身の評価を，畠中は遺稿集の理解を通して追究している。この追究において，シェーラーがこの人間観について「まずは否定的である」ことを確認し，畠中は，シェーラーがその否定的姿勢をとる留保条件を確認する。これにより，シェーラーがこの人間観を「伝統的かつ強固な説をいったん歴史に相対化したうえで，これを自らの哲学的立場から新たにとらえなおすことを意図」していたことを解明している[8]。

「３．ホモ・ファーベル（工作人）の人間観」では，①「『一動物種』としての人間」，②「衝動理論と自然主義的歴史観」，③「ホモ・ファーベルの人間観の限界」の三段に分けて，「思惟がすでに神的理性への参与を喪失し，技術的・伝達的工作的知性となった近代の実証科学主義的な」人間理念として認識されてきた人間観が，シェーラーの思索過程を辿る形で整理される。①では，人間観の定義とこれに対するシェーラーの見解に加え，この立場から規定される人間についての見解が整理される。②では，この人間観に「『自律的な精神性と理性を否認する』」という点で共通性のみられる哲学思想についてのシェーラーの整理を提示され，そこから導き出される各思想における歴史観がシェーラーの見解のもとに整理される。③では，シェーラーが，「自然的なヒト」という観点から人間を見た場合に限ってホモ・ファーベルの人間観を肯定していることを確認し，畠中はこれを起点とするシェーラーの人間観，すなわち「哲学的人間学の要求」に向けたシェーラーの思索を追体験している。この過程を通して，畠中は，シェーラーの著作をもとに叡智人説における「精神」との折衷的な関係を追究し，解明している[9]。

ここまで見てきた 3 つの人間観は，「普通の教養をもつ人びとが熟知している人間理念」にあたるものである。これに対し，つぎに見る 2 つの人間観は，畠中によれば「ごく最近［「人間と歴史」執筆当時に］登場したものであり，それほど周知のものではない人間理念」（［］内引用者補足）にあたるとされている[10]。

「４.生命主義的人間観」では，①「『病気の動物』としての人間」，②「ディオニュソス的な衝動人」に分けて，「ホモ・サピエンスであること自体を一つの不治の『病気』と見て，原始のディオニュソス的生命性からの滑落と考える」人間観がシェーラーの見解に基づき整理・考察される。①では，シェーラーがこの人間観を，人間を「精神的存在」としそれを「形而上学的原理とみなす」点で「ホモ・サピエンスの人間観」と共通性は見られるが，「『精神のせいで病気になった動物』」としている点で大きく異なると捉えたことを踏まえた上でその特徴が確認される。そして，これまで整理した 3 つの人間観に共通する歴史像との対比により，この人間観の意味するところが詳しく整理される。また，畠中は，シェーラーがこの人間観を厳密な理論と捉えることが可能であるとしていた点を明らかにし，この人間観を唱道した哲学者などや同様な結論に至った異なる学問分野の研究者たちの存在を，シェーラーが見解を支える根拠として提示している点にふれている。②では，シェーラーにおけるこの人間観の定義を提示し，この人間観をシェーラーが批判している点が指摘される。この指摘において，畠中は，「人間と歴史」以外の著作を中心としてシェーラーの考えを整理し，シェーラーがこの人間観を「誤り」であるとしつつも，人間観を支える根拠は十分に熟慮されている点に一定の評価を置いていたことを明らかにしている [11]。

「５．要請的無神論の人間観」では，①「人間の責任・自由・任務のための『神の否定』」，②「『可塑性を備えた存在』としての人間」に分けて，「『人間の自己意識をある段階へ』」引き上げようとする理念に基づく人間観がシェーラーの見解に基づき整理・考察される。①では，人間観の定義とその思想の背景が確認される。②では，シェーラーが，知名度の低い「要請的無神論の人間観」を「人間と歴史」において人間観の一類型として選択した背景とその根拠が，シェーラーの所説を紹介する形で記される。これにより，この人間観が，シェーラー自身の提唱する人間観に共通する「歴史における人間の責任，自由，任務を重要視する視点」を備えているという畠中の見解が示されている [12]。

以上を踏まえて，「おわりに」では，畠中による「シェーラーの類型論の意図」の再確認がなされる。畠中は，シェーラー自身の人間観である「全人」に対する 5 つの類型論の意義を，つぎのように結論づけている [13]。

> ……従来の人間観は一面的かつ狭小であり，それゆえこの「全人」という人間理念を十分に明らかにできない。とはいえ，その一面性・狭小性を十分に理解しておかなければ，それも不可能である。その意味において，人間観の類型論はシェーラーにとってたんに並列するだけの類型論にすぎぬものではなく，彼自身の問題意識に基づいた類型化であり，自説を形成するために必要不可欠の仕事であったのである。

### （２）本研究論文の構造

論文の構成に従ってその内容を概観した。その結果，研究論文は，シェーラーの「人間観の類型論」を考察するにあたり，各類型において，基本的には 2 段構成が取られ，「３．ホモ・ファーベル（工作人）の人間観」のみ 3 段構成が取られていることが見て取れる。

2 段構成で示される各人間観において，畠中は基本的に，まずその人間観の定義や意義を歴史的･学問的背景によって整理している。その上で，シェーラー自身の見解の真意や各人間観に対する評価を明らかにするために，「人間と歴史」以外の著作や遺稿集の記述を用いてシェーラーの真意をあぶりだすことを試み，一定の見解に到達している。

この 2 段構成にみられる，事実の確定と畠中が真意を探るために行う資料の整理および

自説を生み出す過程が，シェーラーの類型化の意図やシェーラーの示す人間観，すなわち「全人」それ自体の意味を根拠づけるものとなっている。

一方，3 段構成を取る「4 ホモ・ファーベル（工作人）の人間観」では，第一段目で，「ホモ・ファーベル」という立場から人間観を捉える意味とそれによって規定される人間観が確定され，人間観を規定する背景が，畠中自身の見解も踏まえて述べられる。これを受け，第二段目では，この思想的背景が整理される。そして，第三段目では，この人間観の限界について，シェーラーの思索を辿りながら整理されている。

この構成では，シェーラーが，この人間観を他の人間観とは異質のもの，あるいは人間観それ自体の分岐点として捉えていたであろうことを強調する工夫がなされている。実際，この後に提示される 2 つの人間観は，それまでの 2 つの人間観にみられた「精神」や「自己意識」を踏まえつつも，人間自体の特別性は排除された人間観となっていた。

以上の人間観の配列は，シェーラー自身によってなされたものであり畠中固有のものではない。しかし，畠中は，シェーラーの真意を捉えるという研究課題のもとで，「人間観の類型論」を再考し，その内容をシェーラー自身の受け止め方によって区別して本研究論文を執筆していることが構造として読み取れた。

## ３．専門科学者の研究課程

専門科学者が研究論文を執筆するにあたっては，自身の研究のみならず，対象に対する学界の見解や評価などを先行研究として捉えることが研究の慣例とされる。ここでは，執筆者である畠中和生の学問に対する姿勢や本研究論文執筆の意図を踏まえて研究対象であるシェーラーの哲学について整理し，研究領域全体からあらためて本研究論文を読み解く。

### （１）本研究論文に関わる基本情報

#### １）著者の学問に対する姿勢 [14]

畠中によれば，哲学という学問の方法は，つぎの二つに分類される。第一は〈理論的研究〉，第二は〈歴史研究〉である。

まず，〈理論的研究〉は，学問としての哲学の本質を意味し，「哲学する（philosophieren）」[15]という言葉によって示される。「哲学する」ことにおいては，「この世界とは何か」を追究するために自身の問いに基づく思索・探究が行われる。たとえば，ハイデガーにおける「時間とは何か」，「在るとは何か」などである。すなわち，理論的研究は，古来より哲学者によって示されてきた哲学的な問題関心を探究する過程である。

一方，〈歴史研究〉は，「哲学する」ことによって示されてきた学問的な成果を，哲学者の真意に即して読み解く研究である。哲学者が示してきた真理は，一般には必ずしも理解しやすいものではない。専門科学者が哲学者を追体験することで深く理解し，一般に理解可能な言葉に置き換え，その哲学思想を明らかにしていくことが，すなわち歴史研究である。これらは，本来，文献学に属するべきものであるが，現代わが国の哲学研究において多く用いられているのが実情である。

畠中は，このような哲学研究の方法を背景とし，シェーラーの哲学思想について，その真意に即した歴史研究を行っている。そのために一次文献を用いることは言うまでもないが，その一次文献においても初版を確認すること大切にし，後出の版との違いを捉えながら研究を進めている。

#### ２）シェーラーの哲学

畠中の哲学研究における主題は，「人間と愛」である。ここでは，畠中の研究とシェーラーの哲学との関連を確認する。

〈シェーラーの基本思想〉

シェーラーの倫理観において，「実質価値論，人格主義，情緒主義の三つの根本思想が流れ

ている」ことが，小泉仰（1954）で明示されている。小泉は，この前提のもとで，「人格主義と実質価値論とを，結びつける役割を果しているのが，情緒主義である」とし，「情緒」を考察することで，シェーラーの「愛」の考察を試みている[16]。

また，五十嵐靖彦（1985）によれば，シェーラーの哲学には，「愛・価値・人格・世界・神」という5つのテーマが去来し，「相互に関連する」とされている。シェーラーがとる「価値人格主義」という立場からは，前述の5つのテーマの呼応関係において，「『愛』は人格の本質に属する」とされている[17]。

これらにみられるシェーラーの基本思想からは，畠中の研究主題においてシェーラーの研究が推し進められる根拠が見いだせる。

実際[18]，畠中は，シェーラーは「生命」と「精神」を相互排他的なものではないと考えおり，「人間観の類型論」において提示される各類型で強調される人間の一面性を調整するものとして，「全人」という新たな人間観を打ち出すに至っていると言う。このことからも，シェーラーの思想や哲学的人間学が，「人間」を主たる研究の対象とする畠中にとって大きな影響を与えるものであることがうかがえる。

〈哲学的人間学〉

五十嵐（1985）は，シェーラーの遺稿をもとに哲学的人間学を考察し，哲学的人間学は「形而上学的構想」[19]であるとしている。

また，奥谷浩一（2004）は，「人間の本質，本質構造，世界における人間の位置をめぐる問題関心」を，「真の意味で哲学探究の主要なテーマとしてはっきりと自覚」し，「人間の研究にかかわるさまざまな個別諸科学との接点を失わずに，その成果に依拠するとともこれを総合する」（下線引用者）本格的な試みの「開始点」が哲学的人間学であるとし，「哲学者の側からする総合の模範的な試み」として評価している[20]。

一方で，音喜多信博（2007）は，「シェーラーが『精神』を定義するうえで持ち出しているさまざまな心的能力のリストは，……チンパンジーなどにも（少なくともその萌芽的な形態においては）見出されることが明らかにされている」とし，「時代的な制約」と「人間中心主義」（下線引用者）という意味において，この哲学思想の問題を指摘している[21]。

この点は，鈴木伸国（2013）においても同様の趣旨が読み取れる。鈴木は，哲学的人間学が，人間を動物や被造物と区別して「固有かつ特殊な『現象』として切り出す手法」を用いた「『人間とは何か』という問いへの新しいアプローチ」を提示した「シェーラーの論考を契機として」開始されたとしている。その研究主題は，「人間の固有さを指摘」しようとするものであり，「人間概念の根底的文化性を指摘するもの」であったとされる[22]。

**３）研究論文執筆の意図**[23]

学界における研究視点や評価が大きく分かれる哲学的人間学について，畠中は，シェーラーの哲学を外から批判的に見るのではなくシェーラーの考えをなぞる形で本研究論文を執筆することを目的としている。すなわち，畠中は，〈内在的な手法〉を用いて，シェーラーの意図や考えを再構成することを目的としているのである。

畠中がこの手法を用いた意図は，主につぎの二つの問題関心に基づく。一つ目は，従来，シェーラーは哲学的人間学の提唱者として位置づけられ，その後の〈理論的研究〉によって学問的な発展がなされてきたと捉えられてきたことである。その理由は，シェーラーが哲学的人間学について提起したのちに急逝し，その論考が集成されなかったことによる。これについて，畠中は，シェーラー自身の哲学をきちんと示すことが必要であると考え，遺稿集を用いてシェーラーの真意を解明することを試みることとした。

二つ目は，カントやヘーゲルのような著名な哲学者を対象とした〈歴史研究〉の成果は

多く示されているが，シェーラーのそれはほとんど見られないことである。この問題関心から，シェーラーの哲学が示される基本書的な位置づけとなるものを提示することも研究の課題とした。

これらの研究課題に取り組むために，畠中は，自身の思想的立場からシェーラーを考察するのではなく，純粋にシェーラーの哲学思想を明らかにすることを意図して本研究論文を執筆している[24]。

### （２）研究領域を踏まえた畠中の研究過程

本研究論文は，畠中の著書『マックス・シェーラーの哲学的人間学―生命と精神の二元論的人間観をめぐって―』の第 I 部第 2 章に位置づくものである。哲学的人間学はシェーラーが提唱した学問分野であり，畠中は本書を通して「『哲学的人間学』の根本思想の全体像を出来うる限り再構成すること」(下線引用者）[25]をその目的の一つとしている。

ここでは，本研究論文を収録著書における 1 章として再度読み解き，前項までに整理した内容を踏まえて畠中の研究過程を捉える。

#### １）専門科学者・畠中和生の研究過程

畠中は，従来のシェーラーの哲学的人間学に関する内容や見解が,『宇宙における人間の地位』（1928）や『哲学的世界観』（1929）に依拠したものであったことに対し，これらに加えて「遺稿集」を踏まえて研究した点に，収録著書の特徴を見出している[26]。

このことから，たとえば奥谷が哲学的人間学を「哲学思想の潮流または学派」[27]として捉えてその系譜の検討を試みたことなどに対し，畠中は哲学的人間学におけるシェーラー自身の学問性の保証を試みていることが推察される。すなわち，奥谷が学派の成果を哲学的人間学ととらえていることに対し,畠中は,シェーラー自身の哲学的人間学を見出しているのである。ここに，哲学研究において，専門科学者間で視点の違いが生じることがあぶりだされ，研究の視点をとらえることが，研究過程をとらえるためのひとつの鍵となることが確認できる。

この上で，本研究論文を収録著書に位置づけて読み解くと，畠中が，これまでの哲学研究で生じた疑問や仮説，着目した観点などを起点として，シェーラー自身の哲学的人間学の成立過程を対象とし，一次文献を用いた思索の追体験によって探究していることが，研究論文の作成過程として推察される。

実際[28]，畠中は，シェーラー自身の哲学的人間学がこれまで学問としての哲学的人間学の出発点として位置づけられ，重要視されてはいるが歴史的遺物のように捉えられてきたことに対する疑問が本研究論文執筆の出発点であったと言う。そのため，シェーラー自身の考えをきちんと位置づけるために,「遺稿集」を踏まえた〈内在的な手法〉による研究を行ったとしている。

畠中は，集録著書でも同様にこれに触れており，特に「精神（Geist)」と「生命（Leben)」という二つの原理の相克と調和」にかかわる「二元論的人間観について，内在的に―すなわち,批判的検討はとりあえず措いたうえで,シェーラーの思想を一次文献にもとづいて忠実に解釈するという仕方で―理解すること」が本書の目的であると明示している[29]。

さらに，畠中が，本研究論文や集録著書を通して，一貫して，シェーラーの真意を理解することを目的として探究していることは，その文面からも見て取れる。たとえば，本研究論文では,「人間と歴史」とその他の遺稿集などの記述を関連付けながらシェーラーが意味するところの人間観が捉え直され，その内容が確定されていた。このようにして，畠中は，シェーラー自身の立場から，シェーラー自身が考えていたであろうと思われることを，シェーラー自身の言葉を用いて記述している。

畠中がこの手法を採った理由は，シェーラ

ーを超越的に，つまりシェーラーから離れて別の立場からいわば批判的に読み込むことにより，そもそもシェーラーが何を言いたかったのかが不鮮明になる恐れがある，と考えたことによる[30]。このように目的に合わせて研究手法を区別し，かつ，批判的にではなく対象の真意を捉えるための手法を用いる点に，教師が行う「真正実践」としての教材研究に対する本研究論文の研究枠組みとしての価値が見出される。

**２）収録著書における本研究論文の位置づけ**

収録著書は，3 部構成である。まず，「序章」において，本書の目的が示される。これを受け，第 I 部では「シェーラーの哲学的人間学」と題し，シェーラーの哲学的人間学の全体像が概観される。そのうえで，第 II 部では，「シェーラーの哲学的人間学における諸問題」と題し，シェーラーの後期思想における重要なキーワードが取り上げられ，シェーラーの自説に即した詳説がなされる。そして，第 III 部では，その「後期思想を理解するための補論」[31]として，同年代に「哲学する」ことに取り組んだハイデガーとの関係が明らかにされる。これらを総括するものとして，「終章」では，本書を概観し，残された課題が提示される構成となっている。

本研究論文は，集録著書において第 I 部を構成する一つとして位置づけられる。「第 1 章 哲学的人間学の問題意識」「第 2 章 人間観の類型論（本研究論文）」「第 3 章 人間学思想」から成る第 I 部は，「シェーラーの哲学的人間学の全体像を俯瞰するもの」である。畠中は，その中心を「第 3 章 人間学思想」に置き，第 3 章では「哲学的人間学，形而上学，歴史哲学の三者がどのように関連しあっているのか」という研究課題を掲げている[32]。

このように，本研究論文「人間観の類型論」は，第 I 部の中心となる「第 3 章 人間学思想」の前段階に置かれている。このことから，畠中が，哲学的人間学におけるシェーラーの立論を追体験するためには，まず，シェーラーがどのような問題意識のもとで人間をどのように捉えていたのかを知らなければならないと考えていたことがうかがえる。すなわち，研究領域に関する情報を踏まえた読解により，畠中がシェーラーの「人間学思想」を理解するために段階的にシェーラーの思索を整理していることが推察でき，その段階の一つをなすものが本研究論文，すなわち「人間観の類型論」であることが読み取れるのである。

これらのことから，本研究論文の集録著書における意義は，シェーラーが哲学的人間学を提唱するに至った基盤のひとつとして，「人間観の類型論」が位置づけられる点を明らかにしている点にあるといえる。言い換えれば，シェーラーの哲学的人間学において，シェーラーが人間観の 5 類型をどのような考え方のもとで整理し，それらをどのように捉え，どのように理解していたかを畠中が哲学的人間学を理解する基盤として重要であると認識し，それを詳細に明らかにした点にその意義がある。畠中は，シェーラーの人間観の 5 類型を理解するために，類型化という研究行為に対するシェーラーの真意を明らかにする必要性を見出し，本研究論文においてそれらを探究していたと考えられる[33]。

## ４．学習過程の再構築及び教材研究への示唆

本稿の冒頭で述べた学習科学の見地からは，教師が専門科学の学問性に寄り添った教材研究を行うことにより，深い知識や理解を獲得できる可能性が期待できる。

学習科学における真正実践を教師の教材研究へ応用していくために，ここでは，研究論文の読解を通して得られた専門科学者・畠中和生の研究過程を学習過程に置き換え，哲学領域の専門科学者の探究活動を明らかにする。その上で，教師が教材研究を通して深い理解を得ると同時にそのための方法的な知識を獲得するための示唆を提示することを試みる。

### （1）研究過程の学習過程への変換

畠中の本研究論文作成における研究過程を，各段階で読み取れた問いを基軸に，探究活動として再構築した。その結果，2 つの探究型が見られた。まず，基本的な学習過程を提示し,そのうえで応用的な学習過程を提示する。

表 1 に示す基本的な学習過程では,畠中は,人文科学における探究過程の一形態に従って,これまでの研究から得られた哲学的な探究の問いと哲学の一方法論である内在的手法を用いた思考によって研究を進めていることが確認できる。

**表 1. 本研究論文における基本的な学習過程**

| 探究のための問い<br>なぜシェーラーは人間観の類型を示したのか，そのためにどのように類型化を図ったのか | |
|---|---|
| 学習過程 | 探究を支える問い |
| ①既有知識と経験から生じる疑問 | ・従来の定説は，シェーラーの真意をくみ取っているのか？ |
| ②資料収集（先行研究・一次資料・二次資料） | ・定説で参照されたシェーラーの記述は何か？<br>・定説で参照されていないシェーラーの記述は何か？ |
| ③資料の真意の理解（二次資料の情報整理，一次資料の読解と情報整理） | ・定説で明らかにされたシェーラーの見解は，その真意をどこまで反映できているか？<br>・新たに得られた記述は，シェーラーのどのような考えに基づき，また，どのような宗教的・歴史的・哲学的・時代的背景に紐づくものであるのか？ |
| ④関連付けと再解釈（根拠の選別，答えの構築） | ・定説と新たに得られた記述の関連はどのようなものか？<br>・シェーラーの真意を踏まえた自説を補強する根拠は何か？ |
| ⑤情報の統合と表現（知識形成） | ・どのような配列で情報を知識化すれば，一般に理解しやすいものとなるのか？ |

具体的には，表中に示す探究を支える問いが，対象の真意を捉える作業を進める軸となっているといえる。加えて前章までの内容を踏まえると,この学習過程を通して,畠中が,シェーラーの各人間観についての既有知識を活用しながらそれらを修正し，より深い知識を獲得していることが読み取れる。すなわち,畠中は，系譜としての哲学的人間学の研究という状況から，シェーラー自身の哲学的人間学の研究という状況への変化に応じて,「人間観の類型論」に関する知識を修正しているのである。

つぎに，表 2 に示す応用的な学習過程である。畠中は,「4 ホモ・ファーベル（工作人）の人間観」をシェーラーの思索過程を辿る形で記述している。

**表 2. 畠中が対象の思索過程を辿る学習過程**

| 探究のための問い<br>なぜシェーラーは人間観の類型を示したのか，そのためにどのように類型化を図ったのか | |
|---|---|
| 学習過程 | 探究を支える問い |
| ①既有知識と経験から生じる疑問 | 表 1 に加えて，<br>・シェーラー自身はこの人間観をどう捉え，どう評価していたのか？ |
| ②資料収集 | 表 1 に同じ |
| ③資料の真意の理解 | 表 1 に同じ |
| ④思索過程の分析・推論（根拠の選別，答えの構築） | 表 1 に加えて，<br>・シェーラーはこの人間観についてどのように評価し，自身の問題意識と紐づけてどのような位置づけに置いていたのか？ |
| ⑤情報の統合と表現 | 表 1 に同じ |

この流れから，まず，畠中が，人間観に関する深い知識の獲得に加えて，シェーラーの立場に立った理解を試みていることが見て取れる。また，これを行うため，畠中の学習過程において，分析と推論の手法が加えて用いられていることが確認できる。具体的には，畠中は，忠実な解釈に加えて，この人間観におけるシェーラーにとっての研究上の意義を具体的に理解することを試み，その思索過程

を推論しているのである。

畠中は，このような学習過程を通して，「シェーラーの思想を一次文献にもとづいて忠実に解釈する」ことに探究の視点を置き，シェーラーの「人間観の類型論」に関する深い知識を獲得し，それに続く哲学的人間学の再考の基盤としているということができる。

なお，畠中によれば[34]，学習過程⑤にあたっては，まず，どうすれば読者が理解しやすいものとなるかを考慮して各章の見出しと小見出しを配列して記述内容のイメージを固め，記述を開始する方法をとっているとのことであった。

### （２）教材研究への示唆

ここまで明らかにしてきた専門科学者の学習過程からは，教師が教材研究や授業を行うにあたっての学問的理解の信頼性を補強するための要素が抽出できる。

まず，既有知識を活用し修正することである。学習科学研究の成果によれば，「学習は常に既有知識を背景にして生じる」[35]ことが発見されている。また，畠中の本研究論文執筆の背景にも，「人間と歴史」の内容を踏まえて定説として存立されてきたシェーラーの人間観の類型論に関する一般的な理解が既有知識として置かれている。畠中は，ここから生じた疑問に研究慣例に従って答えていくことで，新しい知識を提示していた。すなわち，既有知識を出発点として，情報を踏まえて疑問を生じさせ，その答えを得るために新たな情報の真意を理解しながら関連性などを発見する過程を通して深い知識が獲得されるのである。

つぎに，教材研究を真正実践として構成するための鍵を提示する。重要となるのが，専門科学者が行う研究の過程である。教材研究の成果において形成された知識の信頼性を強固なものとするためには，教師自身が，取り上げるテーマとそれに相応する学問の探究過程，探究のための視点，扱う資料についての深い理解を得ていなければならない。第一に，教師自身が学問の探究過程と視点を理解していなければ，文面や資料をなぞる表面的な教材研究にとどまる可能性がある。第二に，教師が授業で取り上げるテーマと扱う資料について深く理解していなければ，学習者に対する効果的な支援を行うことができない。この両者が満たされなければ，教材研究に基づき組織される授業は，ともすれば誤概念の学習に終わる危険性をはらむ。すなわち，児童・生徒の深い学習を促進するためには，取り上げるテーマに適合する学問の探究過程および視点を基軸とした教材研究と，真意に則した資料の深い理解がまず教師に求められるのである。

実際，畠中も，本研究論文執筆においては，人文科学の探究過程と哲学的な視点を持って，学問性に忠実に研究を進めていることが収録著書に提示される研究の目的から見て取れた。したがって，学問性に基づく探究過程とその視点を理解し，その過程に重ねて資料を読み解いていくことが，真正実践としての教材研究の鍵となるといえる。

その上で，深い理解を得るための示唆を提示したい。深い理解を得るためには，関連性を発見することと推論することが必要となる。畠中は，研究を深めながら生じたさまざまな疑問に対し，既有知識と研究を通して得られた情報とを，自身の考えに従いながらも客観的に関連付けることによって，新たな知識を提示している。このことは，畠中が，情報を対象化することで関連性を発見し，対象を深く理解していることを示しているといえる。

加えて，畠中は，「4 ホモ・ファーベル（工作人）の人間観」で，シェーラーの立場に立ち，その見地からの分析を通してシェーラーの思索を推論していた。この試みは，探究活動における入門レベルのものとはいい難い。すなわち，専門領域の学習の積み重ねによって学問の背景や方法的な知識が深まった時点

で，分析や推論を踏まえた知識形成を行うことが可能となることが予測される。このことから，教師も同様の手順を用いた教材研究を反復して行い思考することで，学問の背景や方法的な知識が深まり，分析や推論を行いながらより深い理解を得ることが可能となると考えられる。なお，形成した知識の共有を教師間で行うことで，それらの客観化が加速され，より高い信頼性が保障されるといえるであろう。

## ５．結びにかえて

本稿では，哲学分野の専門科学者である畠中和生の学習過程に着目し，教材研究に必要な内容と方法の探求を通して，真正実践としての教材研究のあり方を検討した。

教材研究を真正実践として行うにあたって必要な内容は，対象となるテーマの学問性に基づく探究過程と探究の視点，その探究に耐えうる資料である。また，必要な方法は，教師自身が持つ既有知識を活用すること，そして，関連付け・分析・推論において情報を操作可能なものとし，思考過程を可視化することである。これらを踏まえた教材研究により，教師自身が，情報から深い知識を学び，対象を深く理解することが可能となる。すなわち，児童・生徒が学習を通して深い知識を獲得するためには，教師自身が真正実践としての教材研究における学習者となり，取り上げるテーマの学問的背景とそれに適した学問の探究のあり方を理解し，扱う資料を真意に沿って理解しておくことが求められるといえる。

今後の課題は，児童・生徒が深い知識を獲得していくために，教師が児童・生徒の学力状況などを踏まえながら,「どの言葉につまずいているか」,「どのアクティビティが適切か」等を考えて学習を構成するための手立てを模索することである。

## 註

1）R.K.ソーヤー「イントロダクション―新しい学習科学」R.K.ソーヤー編（森敏昭，秋田喜代美監訳）『学習科学ハンドブック』培風館，2009 年，1-3 頁。

2）対象論文は，①畠中和生「人間観の類型論―マックス･シェーラーの哲学的人間学(3)」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第 58 号，2009 年，33-42 頁。本研究論文は，畠中の博士論文に収録され，②畠中和生『マックス･シェーラーの哲学的人間学―生命と精神の二元論的人間観をめぐって―』ナカニシヤ出版，2013 年の第 2 章を構成している。

3）畠中・前掲註 2）①，34 頁。

4）同上②，12 頁。

5）「人間と歴史」においてシェーラーが取り上げた 5 つの人間観の類型が本研究論文における 2 節から 6 節のタイトルにあてられているが，「シェーラー自身が複数の用語を使用」（畠中・前掲註 2）①，42 頁）しているため固定的なものはないと畠中は註記している。

6）引用元は畠中・前掲註 2）①，34 頁。

7）同上，33-35 頁。

8）同上，33 頁・36-37 頁。

9）同上，33 頁・37-38 頁。

10）同上，33 頁。

11）同上，33-34 頁・39-40 頁。

12）同上，40-41 頁。

13）同上，41 頁。

14）本項は，2015 年 1 月 16 日広島大学にて実施した研究論文執筆者・畠中和生に対するインタビューを基に本稿著者の一人である菅尾が記述している。

15） philosophieren は，カントの『純粋理性批判』（Kritik der reinen Vernunft）において用いられたことで広く知られるドイツ語の動詞である。英語では doing philosophy と一般に訳されている。

16）引用元は小泉仰「マックス・シェーラー

に於ける『愛』について」『哲學』30，1954年，103頁。シェーラーの倫理観について同様の趣旨を表すものとして，上妻（1968）など。

17）引用元は五十嵐靖彦「シェーラーの哲学的人間学をめぐって」『文経論叢．人文学科篇』(5)，1985年，80-81頁。

18）本文は前掲註14）のインタビューによる。

19）五十嵐・前掲註17)，77頁。

20）引用元は奥谷浩一『哲学的人間学の系譜』梓出版社，2004年，5頁・9頁。

21）引用元は音喜多信博「マックス・シェーラーの『哲学的人間学』再考: 『人間中心主義』をめぐる問題」『東北哲学会年報』（23)，2007年，101頁。

22）引用元は鈴木伸国「哲学的人間学の趨勢と人間学へのその寄与」『人間学紀要』(42)，2013年，132-133頁。なお，この学統を指示した者として「プレスナー，ゲーレン，カッシーラー，ガダマーなど」の名があげられている。

23）本項は前掲註14）のインタビューによる。

24）このような研究の意図により，本研究論文で示されるシェーラーの哲学思想が，必ずしも畠中の研究主題である「人間と愛」に対する哲学的な考えや主張ではないことを注記しておく。

25）畠中・前掲註2）②，8頁。

26）同上，8頁。なお，収録著書の書評である音喜多信博（2014）は，「その最大のオリジナリティーは，これまであまり研究されてこなかったシェーラーの遺稿をも参照しながら，未完のままに終わった後記思想の全体像を丁寧に再構成して見せているところにある。」とし，内在的な研究であっても「その思想的広がりは極めて豊かである。」としている。

27）奥谷・前掲註20)，4頁。

28）本段落は前掲註14）のインタビューによる。

29）引用元は畠中・前掲註2）②，8頁。なお，前掲註14）のインタビューにおいて畠中も同様の見解を示していたことを注記しておく。

30）本文は前掲註14）のインタビューによる。

31）畠中・前掲註2）②，9頁。

32）同上。

33）前掲註14）のインタビューにおいて畠中も同様の見解を示していたことを注記しておく。

34）本段落は前掲註14）のインタビューによる。

35）ソーヤー・前掲註1)，8頁。

## 引用・参考文献


五十嵐靖彦「シェーラーの哲学的人間学をめぐって」『文経論叢．人文学科篇』(5)，1985年，77-91頁。

今井道夫「書評 奥谷浩一『哲学的人間学の系譜：シェーラー，プレスナー，ゲーレンの人間論』」『哲学』(43)，2007年，77-83頁。

大滝朝春「哲学とは何か」『中部大学国際関係学部紀要』17，1996年，81-117頁。

奥谷浩一『哲学的人間学の系譜―シェーラー，プレスナー，ゲーレンの人間論―』梓出版社，2004年。

音喜多信博「マックス・シェーラーの「哲学的人間学」再考：「人間中心主義」をめぐる問題」『東北哲学会年報』(23)，2007年，101-103頁。

音喜多信博「シェーラー後記思想の全体像を丁寧に構成する―人間学と形而上学との関連を深く探究した研究書」『図書新聞』3149，2014年3月8日。

小泉仰「マックス・シェーラーに於ける『愛』について」『哲學』30，1954年，103-126頁。

上妻精「M・シェーラーの実質価値倫理学の一考察：現代に即して」『一橋論叢』60(2)，1968年，133-152頁。

マクス・シェラー（樺俊雄，佐藤慶二訳）『哲

學的人間學』理想社，1931 年。
マクス・シェーラー（寺島實仁訳）『哲學的世界觀』創元社，1942 年。
マックス・シェーラー（亀井裕，山本達訳）『宇宙における人間の地位』白水社，2012 年。
鈴木伸国「哲学的人間学の趨勢と人間学へのその寄与」『人間学紀要』(42)，2013 年，131-152 頁。
R.K.ソーヤー「イントロダクション―新しい学習科学」R.K.ソーヤー編（森敏昭，秋田喜代美監訳)『学習科学ハンドブック』培風館，2009 年，1-13 頁。
俵木浩太郎「カント教育思想研究序説(その一)："Idee"と"philosophieren"」『哲學』62，1974 年，331-354 頁。
畠中和生「人間観の類型論―マックス・シェーラーの哲学的人間学（3)」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第 58 号，2009 年，33-42 頁。
畠中和生『マックス・シェーラーの哲学的人間学　生命と精神の二元論的人間観をめぐって』ナカニシヤ出版，2013 年。

著者
菅尾 英代　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
畠中 和生　広島大学大学院教育学研究科
池野 範男　広島大学大学院教育学研究科